

巻頭言

平成30年、2018年が始まりました。今年は学会にとっても節目の年で、なかなか忙しく、かつ今後を占う意味で重要な年になるでしょう。「はやぶさ2」小惑星ランデブーが今夏のハイライトになるでしょう。

日本惑星科学会は、1992年に設立されて四半世紀を経ました。設立当時に学会をリードされていた方々からは世代交代が進み、当時はまだ掛け声ばかりだった月惑星探査も、「のぞみ」「はやぶさ」「かぐや」の経験を踏まえて多くの学会員が「あかつき」「はやぶさ2」「火星衛星サンプルリターン(MMX)」, 月探査や海外共同ミッション, そして小型深宇宙探査に関わるようになりました。理論・実験(計算機実験を含む)・観測(探査を含む)の3本柱の最後の1本が、実体を持って諸外国の深宇宙探査と並ぶようになったことは、学生の頃に入会した私から見ると本当に夢のような迫力です。『惑星科学は探査という実践を伴う営為である。』『日本の理論研究者数の100倍以上、データを扱う研究者や工学研究者が増えるか、もしくは隣接分野から巻き込むかしないと、探査を包含する実証的月惑星科学は回らない。』『そこまで成長できれば安定するね、日本もそうなるかな?』, と当時大学院生だった私に阿部豊先生がニコニコしながら語ってくれたことを今更のように思い出します。来たる10年、RFIとりまとめ、そして日本学術会議の大型研究計画マスタープランの検討などを通じて、月惑星科学で解くべき課題と今後についての議論が方々で行われ、深まりつつあります。今年3月に閣僚級政府間会合ISEF(国際宇宙探査フォーラム)が東京で開かれ、ポスト国際宇宙ステーションの目玉として米国主導の月探査や開発が中印と競争しつつ激しくなりそうですが、外野に振り回されずやるべきことをきちんとやり、本学会員をはじめとした日本の月惑星科学研究者が活躍する場面が増えることを願っています。

2009年4月に発足し10周年を迎えようとしている会津大学ARC-Spaceは、惑星科学と情報科学を融合する形で月惑星探査へ貢献してきています。今年は戊辰戦争150周年でもあり、何かしら目立ってみたいな、と思っています。

出村 裕英(会津大学)